梁啓超は『墓中呼声』を訳したか

―リサールの絶命詞をめぐって―

李　海

1.　はじめに

人民文学出版社 1981 年版『魯迅全集』第 1 巻、雑文集「墳」を見ると、「雑憶」と言う文章の中で、次のような注釈が付されている。

> リサール（J.Rizal.1861-1896）ふつう、漢訳「黎薩」。フィリピンの作家、民族独立運動の指導者。1892 年、「フィリピン連盟」を結成し同年逮捕された。1896 年、再度の逮捕の後、スペインの植民政府に殺された。著作に、長編小説『我に触るるなかれ』、『蜂起する者』がある。彼の辞世の詩「わが最後の別れ」は、梁啓超によって中国語に訳され、「墓中の呼び声」と題された。[1]

注目すべきことは「リサールの辞世の詩」は梁啓超によって初めて中国語に訳され、その題目は『墓中呼声』である。

梁啓超の訳詩はごく少数だが、この注は貴重な情報を提供している。ただ、筆者の管見の限りでは、梁のこのリサールの絶命詞の訳詩はどこにも見当たらない。また魯迅が書いた「雑憶」にて「フィリピンの文学者でスペイン政府に殺されたリサールがいた。彼の祖父は中国人であり、中国でも彼の辞世の詩が訳されていた。」[2]という証言から、魯迅の日本留学（1902 から 1909 まで）当時、その訳詩はすでに存在していた。ただ、その詩の訳者は誰かについて魯迅は明言せず、疑問を残した。

しかし、この注釈では、はっきりとリサールの絶命詞は梁啓超によって訳されたと書かれている。だが、現在までにその訳詩は発見されていない。梁啓超の訳詩は、魯迅にも言

及されたように清末において、多くの中国人に感動を与えた。そのため研究する価値も大きく、関係する研究者の注目を集めている。

筆者は最初 2005 年版の注を見て、その疑問を抱き、関連資料収集の過程の中、いくつかの事実を明らかにできた。小論ではそれを公表し、関係研究者と検討していきたい。

2. リサールの経歴と彼の絶命詞

リサールの絶命詞は梁啓超が訳したかどうかという事実を検討する前に、リサールおよび彼の絶命詞について簡単に触れる必要があると思われる。

安井祐一氏の著作『ホセ・リサールの生涯』によれば、次のとおりである。

> ホセ・リサールは 1861 年 6 月 19 日、フィリピンのルソン島、マニラ市南東郊外にあるラグナ県カランバ村で生まれた。サント・トマス大学医学部を修了して後、スペインにわたり、マドリート大学で医学と哲文学を学んだ。マドリードでの学業を修了し、医師、社会学者、語学者となったリサールは、学問への情熱はやみがたく、ひきつづき、パリー大学で眼科学とフランス語を研究した。1886 年 2 月から 1887 年 5 月まで、ドイツのハイデルベルグ、ライプツイヒ、ベルリンの各大学で、医学、社会学、言語学を研究した。ヨーロッパの自由主義思想に触れ、留学中の 1887 年にフィリピンでのスペイン悪政をあばき、フィリピンの将来の向上を目指した小説『われに触れるな』を出版して大きな反響を呼び起こした。帰国後郷里で、小作料値上げ反対運動を組織してスペイン当局から弾圧を受けた。やむなく国外脱出したリサールは急進的な思想をこめた『反逆』(1891) を発表し、フィリピンの改革運動に勢いを与えた。香港で医者となったあと 1892 年マニラに戻り、フィリピン民族同盟を結成して、社会改革を目指したが、スペイン当局は彼をダピタンに流刑した。96 年にフィリピン革命がおきると、その責任者はリサールであるとしてとらえられ、12 月に処刑された。[3]

その処刑される前に書かれた絶命詞は彼の代表作となり、それは、中国語に訳され、中国では大きな反響を呼び起こした。

魯迅は二回にわたり、彼の文章の中でリサールを取り上げた。

> このごろには、また、一つの偏見があって、皮膚の色が黄色でさえあれば、特別に強い関心を寄せたものだった。現在の某国は当時はまだ亡びていなかったので、私が最も注意したのはフィンランド、フィリピン、ベトナムの事と、往時のハンガリーの事であった。ハンガリーとフィンランドには文人も多く、声も最も大きかったが、フィリピンについてはリサールの小説一冊が手に入っただけだった。[4]

また、『墳』「雑憶」の中で引用していることは先述した。

3．先行研究を吟味する

だが、まだ梁啓超がリサールの絶命詩を訳したかどうかさえ判定できない状況の中で、先行研究では、すでに梁がその詩を訳したという見解が定着したかのように見える。

『国外文学』1983年第4期に掲載した凌彰氏の論文「東海的壮歌――論黎薩爾的絶命詩」では、こう記述している。

> 魯迅は1925年6月16日に書いた「雑憶」一文の中で、中国ではリサールの絶命詞を訳したことに言及していた。最初にそれ（リサールの絶命詞）を中国語に訳したのは中国近代作家の梁啓超である。彼はこの詩の題目を『墓中呼声』と訳した。[5]

『外国文学欣賞』1987年第1期に同じく凌彰氏の論文「論黎薩爾的詩歌」では「最初にそれ（リサールの絶命詞）を中国語に訳したのは中国近代作家の梁啓超であり、訳された題目は『墓中呼声』である。」[7]と記している。

厳萍、龔勲両氏は「評凌彰訳『我最後的告別』」の中で、「中国学者は早い段階でリサー

ルの絶命詞に注目した。梁啓超は最も早い段階で、それを中国語に訳し、『墓中呼声』と名づけた。」[8]と述べている。

以上の先行研究の結論は人民文学出版社 1981 年版の注釈と比較すれば、人民文学出版社の結論を援用したことがわかる。

人民文学出版社は中国において文学作品を出版する権威的な存在である。多くの読者を有していて、その影響力は中国ではもちろんのこと、遠く海外にも及んでいる。リサールの故国フィリピンにおいても、華人を中心に、梁啓超は初めてリサールの絶命詞を漢訳した者として定着していた。例えば、1985 年 5 月 2 日および 6 月 6 日フィリピン『連合日報』で掲載された施頴洲氏の文章「黎薩名詩『我的決別』」の中では次のように言う。「私が知っている限り、リサールの名詩『我的決別』は、これまで 15 種類の漢訳があり、発表の前後順に、15 名の訳者は、梁啓超、林健民、文戈止、林林、周振民、施頴洲、李明堂、林沢、静銘、王世昭、易風、李霁野、緑萍、凌彰、陳天懐である。」[9]

2000 年 5 月 16 日フィリピン『世界日報』第 21 版で掲載した邦帰氏の文章「魯迅談黎薩名詩『我的決別』」中では、「『雑憶』の中にあるリサールに関する解釈によれば、われわれに興奮を感じさせるのは、当時、リサールの絶命詞を漢訳したのは、意外にも清末戊戌維新の改良主義者、大学者の梁啓超であるということだ。」[10]と記している。

2000 年 5 月 16 日フィリピン『商報』第 21 版で掲載された梅楠氏の文章「黎刹・梁啓超・魯迅――読『魯迅談黎刹　梁啓超訳詩』大作」の中で、「早くも 70、80 年前、「黎刹精神」はすでに国境を越え、中国に伝えられて、影響は極めて深く、中国近代の二人の偉大なる思想家、大学者、大文人である魯迅と梁啓超さえも深く感動を受けた。そして、一代一代の中国人と外国人に影響を与えた。（中略）『魯迅談黎刹　梁啓超訳詩』は『魯迅全集』にて発見されたものである。」[11]と述べている。

類似する判断はまだ多く見られる。このような判断の依拠としては、人民文学出版社が出版した『魯迅全集』の中のリサールに関する注釈に由来している。

だが、疑問を持つ研究者も存在する。例えば、『黎薩爾与中国』一書の編集者である周南京氏は人民文学出版社が出版した 1981 年版の『魯迅全集』の注釈を引用した際、「しかし、残念ながら、いろんな手段を使って探したが、いままで、われわれは依然として、梁啓超の中国語訳を見つけていない。」[12]こうように留保している。

疑問を持つのはただ梁啓超の漢訳が見つからないことであって、さらにその詩が存在するか、もし存在するとすれば、はたして梁啓超の訳なのか。こうした点に筆者は疑問を持

っている。

このような梁啓超がリサールの絶命詞を訳したという認識の根源はどこにあるだろうか。この問題解決の糸口は該当する人民文学出版社の注の変遷にあるのではなかろうか。おそらく、これまで発行された『魯迅全集』を通覧すれば、その答えが見つかるかもしれない。2005年版『魯迅全集』の編集委員である朱正氏によると、これまで五つの版の『魯迅全集』が発行された。最初の版は1938年に発行したものであって、リサールについての注釈は付されなかった。1973年20巻版も人民文学出版社から出されていたが、その第1巻の扉頁のところに、1973年版は1938年版の重印だと説明している。最初にリサールの項目に注をつけたのは1956年から1958年にかけて、人民文学出版社が出版した『魯迅全集』(以下1956年版とする)である。1981年人民文学出版社が出版した『魯迅全集』第1巻の注は2005年出版したものとほぼ同じ注釈である[13]。1956年版と1981年版及び2005年版と比較することにする。

「リサール(J・Rizal, 1861-1896)あるいはホセ・リサールと訳し、フィリピンの愛国詩人。当時フィリピンを占領した外国侵略者スペイン人に殺害され、彼の絶命詞『墓中呼声』はかつて梁啓超によって漢訳された。(「雑憶」『魯迅全集』人民文学出版社、1956年、p549)。」

「リサール(J.Rizal.1861-1896)ふつう、漢訳『黎薩』。フィリピンの作家、民族独立運動の指導者。1892年、『フィリピン連盟』を結成し同年逮捕された。1896年、再度の逮捕の後、スペインの植民政府に殺された。著作に、長編小説『我に触るるなかれ』、『蜂起する者』等がある。彼の辞世の詩『わが最後の別れ』は、梁啓超によって中国語に訳され、『墓中の呼び声』と題された。(「雑憶」『魯迅全集』人民文学出版社、2005年、p240)。」

以上の比較から分かるように、1981年版(2005年版)のほうが1956年版の解釈より詳細になっているが、梁啓超がリサールの絶命詞を漢訳した記述に変わりがない、ゆえに1956年版から、リサールの絶命詞を漢訳したのは梁啓超であるという見解はすでに見られていた。

この1956年版の解釈をよく吟味すればわかるように、『墓中呼声』と命名したのは梁啓超という意味ではない。『墓中呼声』はただリサールの絶命詞の漢訳のひとつに過ぎず、梁啓超の訳名とは別に考えるべきである。もしこの注釈に疑問を持つならば、その題目とは関係なく、梁の訳詩を探し出せば問題の解決の糸口となる。しかし、1981年版と2005年版の注では、主語を梁啓超とし、『墓中呼声』の題名は梁啓超によって命名したことを

付け加えた。このような解釈によれば、梁の訳詩は『墓中呼声』となる。しかし、その証拠がどこにあるのか疑問である。筆者の考えでは、このような具体的な証拠がない場合、最初のこの解釈のところに着目すべきである。つまり、1956年版の注釈を参照して、単純に梁はその詩を訳したかどうかを追求することである。

4．訳者は梁啓超なのか

魯迅も証言したように、清末の「救亡図存」（滅亡から救い生存を求める）とも言える社会状況においては、リサールの絶命詞は思想面での意義が大きい、影響のある訳詩である。だが今前述の問題解決のために、重要なのは、梁がそれを訳したかどうかを検討することである。

いくつかの可能性がある。

① 梁が訳したが、その詩は未発見である。

② 梁がその詩を訳しておらず、他の人が訳していた。

筆者は関連する資料を収集し、以下にその材料を論じつつ、その可能性について追求して行く。

梁の訳詩は未発見のため、可能性として梁啓超がその詩を訳してないことが考えられる。梁啓超が該詩を訳していない場合、誰がその詩を訳したのか。筆者がこれまでに知っている中国語に訳されたリサールの絶命詞は、1903年3月17日『新民叢報』第27号に掲載された馬君武（1881－1940）が訳したものである。

読者が馬君武の訳を梁啓超の訳だと誤認したのではないかと筆者は考えている。理由は次の二つである。一つは当時、馬君武が梁啓超と緊密な関係を持っていた。馬君武は、1901年日本に留学し、同郷の湯覚頓の紹介で、梁啓超を知った。しかし、来日前、馬君武はすでに梁啓超の師である康有為とは付き合いがあった。馬君武は来日前、シンガポールにて、流亡中の康有為及び彼の弟子である徐勤に会い、正式に康の弟子となった。また、馬は康有為の命令を受けて帰国し、唐才常の自立蜂起に連携することに当たった[14]。同じく康有為の弟子である梁啓超が来日した弱冠20歳の馬君武と密接な関係を持つのは、自然の成り行きであろう。

1902年2月から、梁啓超は『新民叢報』にて、かの有名な「新民説」を発表し始め、「新

民理念」を鼓吹するようになった。当時、無名である馬君武は梁啓超の崇拝者となり、かつ梁の信頼を得て、梁が 1903 年に米州を外遊する際にも、『新民叢報』の編集を担当し、馬君武は『新民叢報』においても、この時期に特に多くの文章を発表していた。本論で取り上げたリサールの絶命詞は 1903 年 3 月 12 日に出版した『新民叢報』第 27 号に掲載されている。馬はその詩を掲載するに前に、訳詩の理由とリサールのことについて紹介している。

> （前略）フィリピン革命史を読んで、そして、ひそかにわがアジアはなお愛国の豪傑がいることを幸運に思う。その豪傑の名前はリサールである。リサールは実に失敗の愛国者である。一つのことも達成できないまま、すでにスペインの悪政政権の銃殺刑を受けた。リサールは実に文学の才能を持つ愛国者である。彼の一生の事業は、ただ新聞、著作で革命を鼓吹したに過ぎない。リサールは実にフィリピンの大詩人である。日本に滞在しているフィリピンの自由を愛する学生たちは、私と頻繁な交流をしていた。酒が入って、ほろ酔い状態では、彼らは私にリサールの名作「臨終の感想」を大声で歌ってくれる。「臨終の感想」は、リサールが処刑される数日前に作られた絶命詞である。[15]

馬君武は紹介したあと、全詩を引用した。念のため、本論でも、その全詩を挙げておこう。

> 去矣，我所最爱之国，别离兮在须臾，国乎，汝为亚洲最乐之埃田兮，太平洋之新珍珠，惨淡兮舍汝而远逝我心伤悲，我命甚短兮，不能见汝光荣之前途。（一解）
>
> 不迟疑，不彷徨，我国民奋勇兮赴生存竞争之战场，人苟为本国而流血兮，消柏桂之木影，暴原野之严霜，固不辞也。（二解）
>
> 夜色暗澹，如悲我之将逝兮，风萧萧而不长，晓日何时而复出兮，将洒我一腔之郁血以添其曙光也。（三解）

我年渐壮兮我心渐远，我愿未酬兮我命将斩，我最爱之国乎，太平洋之新珍珠乎，我虽死不瞑目兮，以观汝扬光辉于六区也。(四解)

去矣，我最爱之国兮，我满腔之热情，与我身而永化，国乎，汝而能终能得飞跃之自由兮，我戴汝之天以死，遂永托灵于此土，我何忧兮。(五解)

死矣，他日我坟墓之上，长一丛丛荒草兮，开数枝可怜之花，国乎，汝之亲爱热情与我永不相遗，时往往于我墓上吹嘘其花草兮，我之神灵何有乎叹嗟也。(六解)

委我骨于我所最爱之国之原野，我心已足兮，况有安静之月，来相照映兮；温柔之风，来相披拂兮；姣好之鸟，来栖我之墓，唱和平之曲兮，此皆我国之慰我于死后者也。(七解)

男儿诚爱国死则已矣，亦何为此嚣嚣，任我墓之荒废兮，以我墓十字之石标兮，饱农夫之锄犁，任我遗体之澌烬兮，混入本国之杂草兮，为田野之肥料。(八解)

我最爱之本国，我最爱之同胞，哀兮怨兮，其一听我临终之辞，留满幅之爱情于此土，我其逝矣，逆主乎，刽夫乎，贼吏乎，奴隶乎，其将以此真理之安宅为窟穴矣。(九解)

诸友乎，慈亲乎，兄弟乎，爱儿乎，我何忍离汝，我何忍离此最可爱之国，我何忍离此最可哀怜之国，我生也劳，我死也乐，我人世之乙已尽于今日兮，我同胞其勉尽未来之责任兮，我最爱之国方幼稚，我最爱之同胞方幼稚，前途之命运，尚未定兮。(十解)[16]

さきほど述べたように馬と梁は同じ康門の弟子で、梁はすでに有名人であるため、読

者の中に絶大な影響力を発揮している。もしこのことを読者にリサールの訳詩は梁啓超が訳したと誤認させる客観的な原因とすれば、もう一つは馬君武自身の主観的な原因もあると思う。

それは、思想と文章スタイルの両方ともが梁啓超に影響を受け、馬は自らそれを模倣したからである。

思想の面では、馬君武は梁啓超の「民智を開き」の主張に賛同した。『馬君武集』で、彼が梁に追随する時期の様子を見ることができる。ここでは中の二つの例を引用する。馬君武は『新民叢報』第7号（1902年3月17日発行）『女士張竹君伝』の中で次のように言う。「今世において、革命を主張する者は、もっぱら予想した効果を求めることに過ぎず、その原因を検討する者はいない。みんなワシントン、ナポレオンになりたいが、ボルテール、ルソーのような人にはなりたくない。これは成果がないゆえである。」[17]この観点は梁啓超の「新民説」の重要理念である「民智を開き」の論点に似ている。

また、彼はリサールの訳詩を掲載した『新民叢報』第27号の15日後、『新民叢報』第28号にて、「論中国国民道徳頽落之原因及其救治之法」という文章を発表し、冒頭に「中国を改革しようとすれば、必ず中国の道徳から改革し始めるべき。」[18]という主張を打ち出し、これは彼が梁啓超と同じ「改良主義」の陣営に立つことがわかる。

陳春香氏は論文「馬君武的外国文学訳介与日本影響」[19]の中で、馬君武が『新民叢報』に発表した論文は梁啓超の文章スタイルの影響を受けたと推測している。たとえば、リサールの絶命詞を紹介する文章のタイトルは「フィリピンの愛国者」となっているが、論題に入る前に、馬君武は愛国者を弁才のある愛国者、文才のある愛国者、失敗の愛国者、成功の愛国者に分類し、ワシントン・クロムウェル・ユーゴー・ガンベッタら一連の愛国者を列挙していた。このような論拠を列挙した後で、論を展開する仕方は梁啓超論文の一つ特徴である。

このリサールの訳詩は「茶余随筆」の三つの記事の中の一つであって、君武という著者の署名がある。

しかし、読者の視点から見れば、たとえ、これを君武という署名で発表していた文章としても、明らかに梁啓超の文章スタイルであって、たとえ梁の手によるものでないにしても、編集長である梁によって添削されたものと考えるのは不思議ではないだろう。

重要なのは、梁はいつも時代の先端を走り、馬君武の著作、訳業は多くはその後塵を拝していたにすぎない。例えば、梁啓超は1902年11月15日第2期の『新小説』雑誌に

て、ユーゴーとバイロンの肖像画を掲載し、像の後ろには簡単な紹介文字を付していた。この紹介は馬君武が1903年3月27日『新民叢報』第28期に掲載した『欧学之片影』より四ヶ月早い。また、梁は1902年12月15日『新小説』雑誌にて『新中国未来記』第四回の中で、バイロンの詩「希臘の島々」（中国語訳は「哀希臘」）を断片的に訳した。馬君武は2年後の1905年に同詩を全訳した。以上のように、高名な梁啓超を模倣した作品は、読者に認められるのは難しく、それを梁啓超の作だと誤認されてもおかしいことではない。

また、上記馬が訳したリサールの絶命詞は『新民叢報』に掲載されたため、『新民叢報』の主筆が梁啓超であることにより、多くの読者はその文章を彼が書いたものと誤認した可能性が大きい。それがもう一つの誤認した理由である。

当時の実例を見てみよう。

日本留学の経験者である周作人の日記では、『新民叢報』に掲載された文章はイコール梁啓超の作だという認識が現れていた。彼の日記の中に、次のような記述がある。

> 夜、同窓黄明弟から六月出版した『新民叢報』第十一号を借り、これを読んだ。中には、良い本が甚だ多い、皆飲氷子（梁啓超のこと）が著したものである。夜中まで読み、就寝に忍びない。いいぞ、いいぞ。私を仰ぎ慕わせる。（1902年7月3日記す）[20]

今日でも、『新民叢報』と言えば、まず、梁啓超の名を思い出すだろう。確かに、『新民叢報』は、署名からの判断では、圧倒的に梁啓超の文章で占められていた。しかし、『新民叢報』は梁一人の新聞ではない、同じく改良主義陣営の人の言論を発表する場でもある。『魯迅雑文辞典』の『新民叢報』を解釈している欄では、「梁啓超は編集長で、原稿を執筆した人は韓文挙、蒋智由、馬君武らがいる。」[21]と、馬君武は『新民叢報』に原稿を提供した主要な一員であった。馬の存在は無視できない。馬君武は数多く文章を発表していた。例えば、『新民叢報』27号では、馬君武は「黒智児学説」、「論賦税」を発表しており、28号では「欧学之片影」、「論中国国民道徳頽落之原因及其救治之法」などの文章を発表している。馬君武のリサールの訳詩が掲載された当時（1903年3月17日）、梁啓超は米州に外遊のため（1903年正月から1903年10月23日横浜に戻るまで）、日本にはいない。『新民叢報』の編集の仕事を馬君武が担っていたことは前述した。

5．「墓中呼声」の正体

最後に、『魯迅全集』(1981年、2005年版) ははっきりとリサールの絶命詞の題名を梁啓超の「墓中呼声」と断定したのはなぜだろうか。

梁啓超がリサールの絶命詞を訳していないことは、先ほどすでに論議した。しかし別の問題として「墓中呼声」は誰の作なのか。

「墓中呼声」が存在するかどうか、また、存在する場合、どんな詩なのかという疑問がある。実はこれこそ、この問題を解決するもう一つの鍵だと筆者は考えている。つまりこの問題を究明できれば、『魯迅全集』の注の間違いの原因が明らかになるだろう。このため、「墓中呼声」はいかなる詩であったのか、明らかにしなければならない。

実は、「墓中呼声」はペンネームを真吾という詩人が訳した、同じリサールの絶命詞の題目である。

『崔真吾伝略』によれば、崔真吾は、本名崔功河、(1902－1937) ペンネームは真吾、采石、史東。1902年12月5生まれ、浙江省鄞県の人。1925年秋、厦門大学文科外語系に合格。1926年初秋、魯迅先生は厦門大学に赴任。崔真吾の提案により、泱泱社が成立し、編集長に選ばれた。魯迅先生は、泱泱社の機関誌『波艇』を査読修訂し、かつ『波艇』の編集、設計も自ら指導した。1928年春、崔真吾は上海復旦大学文科4年に編入し、半年後卒業し、その間、崔真吾は常に景雲里にある魯迅先生の住所を訪ね、先生の教えを拝聴する。1928年冬、魯迅、柔石、崔真吾、王方仁らと朝花社を組織。さらに、崔真吾の詩集『忘川の水』は魯迅が編集、校閲したという[22]。

真吾はリサールの絶命詞を訳し、魯迅が長い時間関わり、深く関係した雑誌『語絲』(1929年4月1日出版、第5巻4期) に発表している。真吾の詩は1928年6月26日に訳了し、この時期に魯迅は雑誌『語絲』の編集主幹を務めている。

真吾は「墓中呼声」という題名を訳詩につけた。さらに、訳詩の最後では、次のような訳注を付している。

> Jose・Rizalはフィリピン革命家である。彼の祖先は福建省の人である。当時スペインの暴政に反抗するため、1896年12月30日にバグンバヤンで銃殺された。現在フィリピン人は彼が犠牲となった場所にお墓を建て、彼の銅像も高く立てられている。この「墓中呼声」は彼が

銃刑を受ける前18日に、法廷から監獄へ戻る時に書いたものである。彼の胸いっぱいの熱情は、これによってはっきり読み取れるだろう。原文はスペイン語である。今回は英語版から重訳した。この一篇は梁啓超がかつて古文を用いて訳していたと聞いたことがあるが、残念ながら、私は見たことはない。1928年6月26日、訳者。[23]（下線は筆者）

最後の一句に注目してみよう。つまり真吾の記憶によれば、他の人から、梁啓超もその詩を訳していたと聞くが、しかし彼は実際にその詩を見たことがない。その詩を目にしたこともないとすれば、その題名を知るすべもないはずである。

さらに、魯迅の真吾との付き合いに関してかなりの記録が残されている。韋啓良氏は「魯迅和崔真吾」一文の中に、以下のような記載がある。

魯迅は1926年から1936年の日記では、崔真吾との付き合いの記録は104条ある。『魯迅日記』の記載によれば、魯迅と崔真吾の面会は少なくとも80回にのぼり、崔真吾が魯迅に送った手紙は16通で、魯迅の返信は8通である。[24]

これほどに真吾は魯迅との交流があって、『魯迅全集』を編集する魯迅研究者たちは、真吾の名はよく知っていたはずである。リサールの注を付けた『魯迅全集』の編集者たちは、真吾が聞いた話を事実とし、リサールの絶命詞の以前の中国語訳者は梁啓超と誤認したであろう。

おわりに

人民文学出版社の一つの注釈に注目し、それと関連する資料を収集した結果、意外な展開が見られた。まず、リサールに関する注釈は早くも1956年人民文学出版社版の『魯迅全集』に見られ、その後、版を重ね、日本でも人民文学出版社1981年版『魯迅全集』（1986年学習研究社により発行）を全訳し、梁啓超はリサールの絶命詞を「墓中呼声」と題して

訳されたとの記述は変わりがない。

しかし筆者の研究では、これまで発見された最も早い段階でのリサールの絶命詞の訳詩は、1903年梁啓超が主筆を務めていた『新民叢報』に掲載された馬君武のものである。この資料の提示によって、これまで間違った、もしくは不明と記されたものを訂正することができるだろう。例えば、胡從経氏は「愛国強音　革命暁角――作新社版『学生歌』」一文の中で「リサールのこの深遠なる影響を及ぼした詩は、遅くとも1904年には、漢訳され、中国の若者に捧げた。」[25]と記している。1991年上海書店出版した施蟄存が編集した『中国近代文学大系』第11集・第28巻翻訳文学集三にも、同じくリサールの絶命詞が掲載されていた。訳者は未署名と書かれていた。2001年出版した『黎薩爾与中国』一書にも、その詩が転載され、訳者については未署名となっている。以上で取り上げた訳詩は、1903年3月17日『新民叢報』に署名君武の訳詩と同一物であるため、胡氏の判断は、1年前倒し、1903年の段階で、リサールの絶命詞が中国語に訳され、その訳者は馬君武であるという結論が確定できる。

当時馬君武による梁啓超の文体の模倣や、当時の人による『新民叢報』と梁の関係の認識から総合的に判断すれば、馬君武が訳したリサールの絶命詞が梁啓超の作と誤認された可能性が十分にあると思う。さらに、筆者は「墓中呼声」と梁啓超の関連として、これまで『魯迅全集』の注の変遷に注目し、「墓中呼声」は別の詩人が訳した同じくリサールの絶命詞の題名であることが分かった。しかも、魯迅と真吾は緊密な関係のゆえ、『魯迅全集』の編集者は魯迅の雑文の中に言及してきたリサールの絶命詞に関わる認識について、真吾の推測を根拠として、梁啓超がリサールの絶命詞の訳者であると認定していたのではないか、という可能性を指摘した。『魯迅全集』の編集者は注を付ける際、真吾の訳注を参考にしたと考え、それを考証することなく、リサールの絶命詞をかつて訳したものが梁啓超であると書いたのではなかろうか。

注

1『魯迅全集』第1巻、人民文学出版社、1981年、p227。訳文は『魯迅全集』第1巻（学習研究社、1986年）pp. 294-295を参照した。
2『魯迅全集』第1巻、人民文学出版社、1981年、p221。
3安井祐一『ホセ・リサールの生涯』芸林書房社、1994年。
4「随感録」『集外集拾遺補編』『魯迅全集』第8巻、人民文学出版社、1981年、p79。訳文は学習研究社、1986年翻訳した『魯迅全集』第10巻、p126から引いたものである。

5「雑感」『墳』『魯迅全集』第1巻、人民文学出版社、1981年、p79。訳文は『魯迅全集』第1巻（学習研究社、1986年）p288から引いたものである。
6原載『国外文学』北京大学、1983年第4期。本文は周南京主編『黎薩爾与中国』（南島出版社、2001年）p314から引用したものである。
7原載『外国文学欣賞』湖南省外国文学研究会、1987年第1期。本文は前掲『黎薩爾与中国』p298から引用したものである。
8原載『世界名詩鑑賞詞典』北京大学出版社、1990年。本文は前掲『黎薩爾与中国』p439から引用したものである。
9前掲周南京主編『黎薩爾与中国』p343。
１０前掲『黎薩爾与中国』pp. 432-433。
１１前掲『黎薩爾与中国』p435。
１２前掲『黎薩爾与中国』p94。
１３朱正「略説『魯迅全集』的五種版本」『中国図書評論』、2006年、pp. 4-7。
１４馬君武と梁啓超、康有為の関係については、莫世祥編『馬君武集』（華中師範大学出版社、1991年）が詳しい。
１５『新民叢報』第27号、1903年3月12日、p89。
１６『新民叢報』第27号、1903年3月12日、pp. 89-91。
１７『新民叢報』第7号、1902年3月17日、p118。
１８『新民叢報』第28号、1903年3月27日、p109。
１９陳春香「馬君武的外国文学訳介与日本影響」『広西大学学報』（哲学社会科学版）2007年、p102。
２０『周作人日記』上、大象出版社、1996年、p344。
２１『魯迅雑文辞典』山東教育出版社、1986年、p261。
２２王文達「崔真吾伝略」『広西師範大学学報』（哲学社会科学版）、1986年pp. 81-86。
２３『中国資料叢書4　語絲』第9冊、大安、1965年、p218。
２４韋啓良「魯迅和崔真吾」『学術論壇』第5期、広西社会科学院、1983年、p90。
２５胡従経『胡従経書話』北京出版社、1998年、pp. 317-318。